ピアノ・ソナタ 第3番 ハ長調 op.2-3

満を持して出版した最初のピアノ・ソナタ群は、それぞれがベートーヴェンの〝革新性〟に満ちた曲であった。第1番は調性、第2番では形式でそれを示したが、この第3番ではピアノ協奏曲を思わせる巨大な書法と調の特殊性が盛り込まれている。チェンバロに取って代わったフォルテピアノも、当時はまだ完成した楽器ではなく、音量・音域など満足のいくものではなかったが、ベートーヴェンはその限界を超えるような音楽を書き、常に未来を見据えた創作を行なっていた。

ピアノ・ソナタ 第19番 ト短調 op.49-1

ベートーヴェンのソナタは全32曲あるが、それらは出版順になっているため、必ずしも作曲順に並んでいるわけではない。op.49の2曲は、実際には第4番の直前に書かれた。「2つのやさしいソナタ」というタイトルが与えられており、弟子のために書いた作品と見られる。第1楽章にアンダンテが置かれているのが少々不思議な印象をかもす。第2楽章は一転してスタッカートに彩られた軽やかな雰囲気になっている。

ピアノ・ソナタ 第26番 変ホ長調 op.81a《告別》

ベートーヴェンの32曲のピアノ・ソナタの多くには副題が付けられ、それらは広く親しまれているが、ベートーヴェン自身が命名したのは第8番《悲愴》と第13番《幻想曲風》、そしてこの《告別》の3曲のみである。ベートーヴェンの弟子であり、パトロンでもあったルドルフ大公がナポレオン戦争を避けてウィーンを去った1809年に書かれ、彼との別れを惜しんだベートーヴェンが、このソナタの第1楽章に「告別」と書いたのだ。序奏つきのソナタで、冒頭主題3つの下行音型には〝Lebewohl（さようなら）〟の言葉が記されている。寂しく、哀しげな第2楽章は「不在」の題を持つ。切れ目なく奏される第3楽章は「再会」と名付けられ、再会の喜びと感動を表すように急速な音型が終始鍵盤を駆け巡る。

ピアノ・ソナタ 第7番 ニ長調 op.10-3

op.10を構成する3曲のうち、もっとも規模の大きい本曲は、4つの楽章を擁し、内容もいっそう深くなっている。特にそれを象徴するのが第2楽章。非常

に内面的で、「ゆっくりと、そしてメスト（悲しげに）」という指示通り、深い嘆きに満ちている。下行音型も多く、強弱の変化も唐突で、様々な感情が錯綜する。第 1、3、4 楽章ではオーケストラの音色を意識したような音使いも見られ、楽章の数だけでなく、響きとしてもスケールの大きな曲に仕上がっている。

ピアノ・ソナタ 第 28 番 イ長調 op.101

前曲に続き、歌謡性が強く、従来のソナタ形式にあてはめて分析することが困難な曲。第 1 楽章はイ長調でありながら、属調のホ長調を思わせる開始で、伸びやかな旋律が奏でられる。第 2 楽章は遠隔調となるヘ長調の行進曲風。第 3 楽章には「ゆっくりと、そして憧れに満ちて」という指示があり、途中で第 1 楽章の美しい旋律が回想される。前曲と合わせて、カンタービレな旋律と教科書的なソナタ形式からの完全な脱却という二つの成果が実った、新しい時代を切り開いた曲である。